

特集



MRAキャンペーン・レポート

「人民革命」から 「道義革命」へ

MRAフィリピン

国際キャンペーン

MRAフィリピン国際キャンペーンは一月十日から十六日にかけてマニラで開催された。これには、一月三日から九日までルソン島中部のリゾート地バギオで開かれたMRAアジア・太平洋地域責任者連絡会議に参加した十ヶ国十五名が参加した。一九八六年二月の「人民革命」以降の一連の民主化並びに改革の基盤となる「道義革命」を社会の各層に浸透させるべく活動しているフィリピンMRAの方々が、幅広く各界の方との会合を企画してくれた。

一、二三主要閣僚と

会談

アキノ政権の安定度と行く末を占うと言われた地方選挙の投票日を数日後に控えたこの時期に、私達は三人の主要閣僚と一時間ずつ会談する

MRAフィリピン国際キャンペーン・レポート/藤田幸久	1P
MRAタイ国際キャンペーン・レポート/川口昌宏	7P
第七回通常総会	9P
最高の出逢い/泉 潔子	11P
中国の近代化に必要な新しいビジョン/パリス・チャン	13P
アフリカ・ザンビアで過ごした2年間(その5)/寒河江亮	15P
夫婦の関係/劉 仁州	19P

機会を得た。

(1) マングラプス外相夫妻

かつてガルシア大統領のもと、三十代の若さで外務大臣を経験したマングラプス氏は、一九七二年マルコス大統領が戒厳令を宣言した際、幸運にも逮捕を免れてアメリカに亡命することが出来た。その間アキノ上院議員とアメリカで政治活動を共にしていた彼は、コー（スイス）やパンチガニー（インド）のMRA国際会議に参加した。アキノ上院議員暗殺というショッキングなニュースが飛び込んだのは彼がコーの会議に出席中のことであった。

今回のキャンペーンで、ご夫妻は私達の一行を自宅や親戚の家にホームステイとして受け入れ、特にパシタ夫人は地元チームの一員として活躍され、同夫人が呼び掛けたレセプションには各界から九十名余りの人がが集まった。

外務省で行われた外務大臣との会見は一時間以上にも及び、紛争国フイジーやスリランカで、対立する人種間の間に入って紛争の解決にあたっていているMRAの動きに大臣は熱心に耳を傾けた。

(2) イレト国防相

清廉で生粋の軍人肌のイレト国防相は、マルコス政権下で、腐敗した

軍人が重用され規律が乱れる事態を諫めるべく参謀長を辞任した。これに怒ったマルコス大統領は彼をイラン大使、そして後にはタイ大使として国外追放した。

我々一行が迎えられたのは、アギナルド基地四階のホールで、一九八六年二月の革命の発端時に、エンリレ国防相とラモス参謀長代行がたてもり記者会見が開かれた歴史的な場所である。歴代国防相の写真が壁にかけられていた。大臣は、フィリピン最大の課題が社会全体の道義復興 (Moral restoration) にあると強調し、特に軍の規律と統一の維持にフィリピン安定の鍵があると述べた。そして、タイの軍が民生安定に実績をあげたプロジェクトを勉強すると共に、国民に仕える軍隊作りを目指して、数名をコーに派遣してその成果を活かしたいと述べた。また、自分も引退でもしたら、かねてから念願のコーや各国のMRAを訪ねて勉強してみたい、と微笑んだ。

それから数日後、イレト国防相辞任のニュースが伝えられた。これによってラモス参謀長が国防相に就任、昇格を待ち望んでいた二十一名が將軍に就任した。きれいな身の引き方であった。

(3) コンセプトオン通産相

実業家として成功した同氏は、一九八四年に不正選挙を監視する民間ボランティア団体NAMFRELを組織し、一九八六年の選挙では不正な政府の集計より一足早く集票結果を発表し、後の「人民革命」の引き金となった。

大臣は先ず、貧困追放の政策について説明すると共に、最近投資が上向きになった理由として、労使関係の改善、極貧層における雇用創出、団体交渉権の増進などを挙げた。日本からの投資も期待しているようだが、一方で進出企業の「文化的摩擦」、日本式慣行の押しつけ、閉鎖性などから問題が起きていることも明らかにしてくれた。

また、毎週水曜日の閣議で閣僚が一緒に祈って国政の状況について反省すると共に、アキノ大統領は人前で神について語ることを恐れず、精神的側面を政策に反映させている、と指導者の姿勢について語ってくれたことに、私達は新鮮な感動を覚えた。

かつては正に身体を張って独裁者に立ち向かい、今また姿勢を正して改革に取り組むこの三人の閣僚からは、その強い意気込みと、自分を捨てたさわやかさというものが強く感じられた。



●かつて日本軍の捕虜生活を長く体験したマングラプス外相(左端)。



●フィリピン国際キャンペーンに先立ちアキノ大統領を表敬するインドMRA代表ラジモハン・ガンジー氏(左)。右はマングラプス外相。

一、じやばゆきさん

問題

大学の学生代表やインテリ層との懇談では、この問題が日比関係の象徴的な問題として度々指摘された。

フィリピン議会ではこの問題について数か月にわたって聴聞会を開いているが、この中で、フィリピン女性が日本の暴力団や水商売のオーナーに暴力やリンチを受けた想像を絶する体験を証言している。第二次大戦中の日本人の残酷さが「死の行進」や「サンティアゴ城の虐殺」などで多くのフィリピン人の心に残っているが、恐らくこの人々はじやばゆきさんに対する虐待ぶりを見て、現在の日本人も四十年前と全く同じだというイメージで見ているのではないかと思ひ、一瞬ドキリとさせられた。

一方私は、じやばゆきさんのルートが行われている場所を実際数カ所回って見たが、以下のような根本的な問題を認識させられることになった。

(1) フィリピン経済の再建、雇用創出、貧富の差の解消が先ず必要。

(2) 生活設計、目的を持って日本で働き、立派に一家全体を支えている人々と、いわゆる売春に陥る人々

を区別し、扱う必要性。

(3) 外国人労働者に対する諸制限が、却って法の網をくぐって入国する人々を増やし、それが暴力団介入のきっかけになるという実態の認識。

(4) 日本からの観光客減少も大きな原因で、フィリピンへの観光誘致が内需拡大と雇用創出につながるといふ事実。

従って、この問題を単に現象としてではなく、フィリピンの長期的な発展の為にどう解決したらいいかという観点に立って日本側が努力すべきである。批判の多い援助プロジェクトと共に、日本の態度と対応が厳しく問われている。

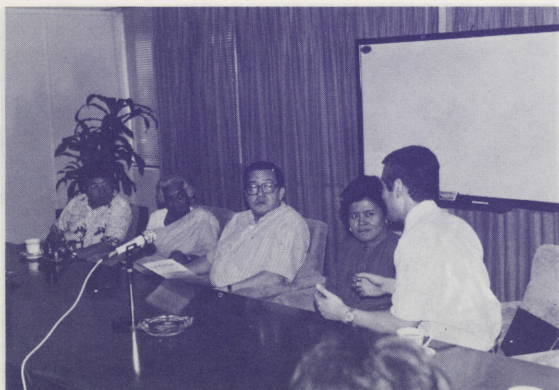
二、アリババと四十人の盗賊

シン枢機卿は最近MRAの友人に、「我々フィリピン人はやつとアリババ（マルコス大統領）を追い出したばかりで、それで全てが解決した訳ではない。まだ四十人の盗賊は国内にいる」と語った。正に現政権の初期は思惑の違った群雄割拠の時代であった。ようやく落ち着いた今後の課題は経済復興、社会政策、そして外国からの信頼の回復である。それ

には二十年の独裁（アリ）とその取り巻き（盗賊）を結果的に許した国民一人一人の自覚と責任が不可欠であろう。今回、自分の地位や時には命をかけてマルコスを追い詰める集会等に参加していたという多くの女性インテリに会ったが、こうした人の輪が広がり、一人一人の自己変革にまで至る時、それが社会不正と貧富の差の是正、そして民生安定へとつながると思われる。

今フィリピンが必要なのは外国からの信用と友情である。十二月の竹下首相の訪問が極めて評判のよかった最大の理由は、重火器を持たないたった八人の護衛を連れただけでマニラ入りしたということである。駆逐艦や特別部隊を送りこんだ他のASEAN首脳に比べてフィリピンの治安を「信頼」してくれたという訳である。投資も望まれているが、必ずしも製造業でなくとも、環境破壊につながらない、自然をいかした観光開発の方がこの国にあつてはるかもしれない。より多くの外国人が訪れ、個人的友人を作ると共に、この国を信頼しこの国にあつた、この国の人々による自助努力を見守り後押しすることが望ましい。

藤田 幸久



●閣僚は全員民間企業の地位を離れ、資産を公開して襟を正しているというコンセプション通産相(中央)。



●アギナルド基地内でイレト国防相(中央)を訪問する一行。

戦略村と日本の援助

MRAタイ国際キャンペーン

MRAタイ国際キャンペーンは二月二十一日から三十日まで開催され、七ヶ国から十五名が参加した。タイとMRAの結び付きはビブソンクラム首相の頃にさかのぼり、当時は毎年スイス・コーのMRAセンターにタイ米が寄付されていた。また現国王、王妃、国王の母君などもかつてはコーを訪れたこともあった。

そして英名君主として名高いプミポン国王の遺暦を国民を挙げて祝った昨年は二十名の代表がコーを訪れ、これらの人々の招きで今回のタイ訪問が実現した。

一、民生安定こそ

共産ゲリラへの解答

東南アジアの中央に位置するタイは、隣接国が全てヨーロッパ列強の植民地と化する中でその独立を死守したが、インドシナ三国が共産化した一九七〇年代には共産化の危機にさらされた。特に一九七六年には、中国の支援を受けるタイ共産軍は一二、五〇〇人の武装ゲリラを擁し、全国の辺境二万の村が共産党の影響下

に置かれ、前線国家「タイは共産化の危機感に溢れた。この時に「共産軍との戦いは貧困との戦いで、武器を以っての戦いではなく、人を以っての戦いである」と、国王自らが民生安定のための戦略村構想を掲げた。そして道路や運河の建設、入植及び自主管理村の建設、農業技術・品種改良・市場調査の援助による換金農作物の生産、流通業者（主に華僑）からの保護といった対策による農民の収入増加をもたらした。

共産軍が最後まで抵抗したタイ中央部のカオ・コー山地でゲリラを鎮圧しながらこの戦略村建設の陣頭指揮にあたったのがピチット大佐（当時）である。そしてバンコックの農業大学を卒業してこの地域に農業技術指導員として赴任したのがロサクン女史（通称ムー）であった。貧困が故に共産党に組してゲリラ戦を挑むジャングルの中の農民に対して、懐にピストルを忍ばせた彼女は毎晩スピーカーで、「武器を捨てて新しい村作りをしよう」と呼び掛けた。（このムーのストーリーは昨年九月TBSのドキュメンタリー「ハロー人間

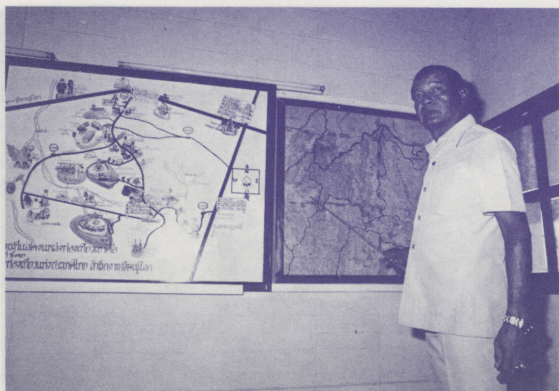
グラフィティー」で放映された。）

一九八二年に共産軍が投降して以来、この地域はモデル農村となり、新しい作物が内外の市場にも出回るようになり、年収も三倍以上、戦略村の数も六〇から六〇〇に増えた。この中には、かつては麻薬栽培を行っていた山岳民族のモン族やリス族なども入っている。しかし、技術指導をすればするほど、農民一人一人の自立心、規律、人格形成、相互扶助意識向上の必要性が感じられるようになり、それらを学ぶためにムーを初めとする戦略村開発に携わる軍人、専門家、社会福祉団体の役員がここ二三年コーの会議に参加した。

二、戦略村の訪問

今回私達一行はこれらの人々の案内でミニバス二台に分乗して四日間二千キロの行程を消化した。ホスト役は今は大將となった前述のピチット陸軍司令官補で、陸軍No.2の地位にある。

標高一五〇〇mのカオ・コーに登る急斜面の両側を指差しながら、地雷やゲリラの待ち伏せで同僚や村人が殺されたという生々し、説明を聞



●戦略村について説明するピチット大將。数少ないアメリカ士官学校卒。



●モン族の青年達に農業指導をするロサクン女史(愛称ムー、右)。

き、私達は生きた歴史を学ぶことができた。山頂には、地元や全国からの寄付でできたという戦争記念碑がそびえ、犠牲者の名前が刻まれている。私達はそこで献花した後周辺のプロジェクトを視察した。アスパラガス、パッションフルーツ、桑、米、きゅうり、牧畜、養蚕、灌漑、土地改良、植林等々、土地の特徴に依じて様々なプロジェクトが進められている。この他に婦人会活動、老人組織、子供のラジオ体操や伝統舞踊の教室なども行われている。行く先々で村人達がピチット大将やムーに寄って来ては相談事を持ちかけていた。

ゲリラの攻撃で肉親を失ったり、不具者になったりしながらも、村に必死にとどまり平和を勝ち取ったという思いが、村人の愛着心と連帯感を深めている。もう一つ印象的だったのは、「自助努力」の精神である。このプロジェクトは低率のローンで賄われる事はあっても援助（寄付）という形はなく、全て自分で稼いで返却するという方式である。最近ピチット大将のアイデアで始まった退役軍人の入植やボランティア活動もローンによるものである。農民、入植者、農業指導者、軍の間の相互信頼と協力関係が不可欠であり、ピチット大将やムーも月に一回は泊まり

がけてカオ・コーを訪れている。

「働くキング」と呼ばれる国王の下、辺境の人々の生活や社会福祉の向上に取り組むこの人々の姿は、ギラギラして手の汚れているという軍人のイメージとは違っていた。国を愛し、尽くす事に生き甲斐と誇りを感じるこの青年将校グループの実績は内外で高く評価され、最近では近隣諸国も自国の軍の改革とも合わせて、このタイの経験から学ぼうとしている。

二、カンボジア難民 キャンプ訪問

今回訪問したサイト2は、一九八五年のベトナムによる乾期攻勢でカンボジア領内からタイ領に移動し合併されたソン・サン派系の七つの難民キャンプから成り、現在十六万人の難民を擁するが、これはプノンペンに次いで世界第二のカンボジア人口である。

以前に比べ、衣食住の状況は一応改善されているものの、問題は「パレスチナ現象」と呼ばれる難民状況の恒常化である。特に十四才以下の人口が四十九%、五才以下が二十三%と、故国を知らない子供が増えているのが問題で、アイデンティティの維持が大きな課題となっている。

こうした中で、キャンプの管理責任者十名が過去四年間に、コー、ワシントン、小田原のMRA会議に参加して、キャンプの状況や自らの体験を伝えると共に、指導者としての心構えや理念について学んだ。このうちの六名と我々一行は二時間におたつて懇談会を開いた。歓声を上げて懐かしそうに私達を迎えてくれた彼等は、キャンプに戻った後もMRAで学んだチームワーク、自助努力の精神、責任感、瞑想の持ち方等を、実際の活動に活かしていると報告してくれた。

バンコクに戻った我々は、難民キャンプ訪問のアレンジをしてくれたクメール赤十字のソン・スーベール（ソン・サン首相子息）とタイ陸軍の戦略村担当の将校とを交えて、国境地帯の共同プロジェクトについて意見交換をすることができた。カオ・コーで成功したような方式をカンボジア国境でも実験し、さらに難民キャンプとも交流して共同でプロジェクトを推進しようというものである。特にカンボジア帰国後に活かせる職業訓練や農業指導について検討していくことになった。また、日本に対しては子供達の教育プロジェクト（仏教教育、スカウト活動、体育活動）についての援助が要請された。



●故国を知らない難民の子供に、アイデンティティの養成が急務。フランスの教会グループの寄付で作られた古典舞踊教室。



●スカウト活動(写真)や仏教教育、体育活動は子供達の規律やチームワーク育成に大きな効果を上げている。

四、一触即発の

反日感情

首都バンコックにおけるプログラムはタイ全国社会福祉協議会（NCSWT）によって企画された。度々MRAの代表を迎えたサンヤー枢密院議長は首相、国会議長、最高裁判所長官を歴任し、世界仏教連盟（WFB）の会長も務めている。MRAがシン枢機卿、ダライ・ラマ、ビルマのウー・ヌー元首相など宗教を越えた精神的指導者との交流を果たしていることを高く評価された。

ソン・ティー副首相は、急激な工業化や森林の伐採などによる環境破壊が急増していることを指摘し、その対策に関する協力を要請した。シチ外相は日・タイ関係について多く言及し、日本からの投資は急激に増えているものの、両国間の文化や習慣の違いなどから生じるミスアンダスタンディング（誤解）が多くあると、外務大臣としては極めて直接的な表現を使い、日本人も華僑のように長期にわたって現地に溶け込むやり方もして欲しいと要望された。修交百年を迎えた昨年は盛り沢山の行事が行なわれ、日本政府もしばしば「日タイ関係はかつてないほど

良好」と宣伝しているものの、実際にはそれとはまるで違った感情が存在することが至る所で感じられた。

八七年度は前年度に比べて、日本からの投資が実に三〇倍に増えた。円高に伴い大企業ばかりか中小企業に至るまでタイに殺到した。私が「自分は企業に勤めない数少ない日本人です」と冗談混じりに自己紹介をすると、途端に皆どつと笑って話しかけてきたことからしても、その雰囲気の手取るように感じられた。また鳴り物入りで行われた日本からの援助も相変わらず器ばかりが大きく、一般のタイ人には縁遠いもののようなのである。請け負った建設会社ばかりか、設計、材料に至るまで日本からのもので現地での反発を買った「タイ文化センター」を初め、建設費だけの援助で、運営費の捻出が逆にタイの負担になっていく東海岸の肥料工場や教育テレビ局の建設など、タイ側から疑問視されているものも多い。一方、昨年メナム河の河口に東南アジア最大級の吊り橋が作られたが、日本側はこの橋の建設のためにわざわざ鋳物工場を作り、タイの職人に技術訓練までして独立させ、今では日本製品に対して価格で勝り他のアジア諸国からの注文が入るほどまでになったと（ ）とである。ところがこ

ういう日本に関する「いい話」はタイの人々にはまるで伝わっていないのが現状である。こうした状況を裏づけるかのように、別の首相経験者は次のように語った。

「今の状況は反日デモの起こった一九七四年頃に似ている。この雰囲気が続くと、あの頃のように第三のグループによって反日感情に火がつけられ、無知な一般のタイ人は扇動されてしまう。民間の人達による身近な交流が必要だ。その際、道徳的な協力や相互援助による自助努力の啓発といったMRAのような精神面での裏づけも重要である。」

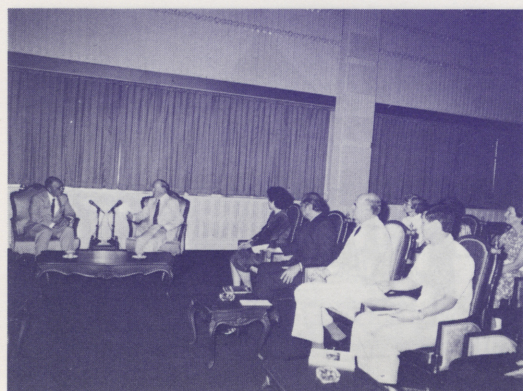
五、国造りの基本に

沿った援助を

竹下首相は十二月のASEAN首脳会議でSecurity（安全保障）面も含めた日本の援助ということ唱えたが、日本が自分の事情だけで振舞うのではなく、タイの立場に立って、タイの人々と一緒に、タイの最も必要としている国作りの後押しをするべくはつきりと方向転換する必要がある。またそういう姿勢を明確に表わし、伝える努力が尚更大切である。派生効果が大きく、継続的な人的援助も可能な戦略的援助

など正にこれに適している。今回接したいわば軍の社会改革派グループ、インテリ、社会福祉団体は、タイがこれ迄のように外部要因の均衡だけに頼って生きるやり方に不安を抱き、自らが社会の自己改革を担おうという意識を持つ人達である。こうした努力を後押しすることこそ、タイ自体の成熟と安定、そして東南アジア全体の平和と安定につながるものと考えらる。

藤田 幸久



●ASEANで最も経験の深いシチ外相(左)は、タイ社会に溶け込む日本人の進出を要望した。



タイを訪れて 考えたこと

川口 昌宏

日本大学理工学部教授

MRAの代表団が、本年一月二十一日から月末までタイの全国社会福祉協議会の招きでタイを訪れた。それまでも細いパイプではあったが、随分と長いあいだ交流のあったタイの関係者と交流し、タイに於けるMRA活動の活性化を図ると同時に、タイ国内の様々な問題に創造的に取り組んでいる人々の士気を、MRAとの接触によつて高めたいというタイ側の意向があったと聞いている。一行は、元英国国連公使マッケンジー氏を中心とする英国人夫妻三組、キプロス島のMRA事務局長グランディ夫妻（スイス人）、スウェーデン人一名、スリランカ人一名、フィン人一名、日本人二名であった。日本人は、MRA日本協会の藤田さんと、以前タイに二年程滞在勤務した縁で、私が参加した。

MRA的友人の心地よさ

これほどの長期間MRA関係者と同行するのは初めてだったし、外国人と一緒にするのも珍しい体験であった。そして、全く何よりも、この人々の素晴らしい気持のよさに感服し、長いあいだ探していた人々に巡りあったかのような思いであった。何が違っていったのかまだよく理解

出来ないが、相手を尊重し、一つ、かつ正直に物を言う心が気持よかつたのではなかつたらうか。MRAには四つの基準があるが、その他に彼らの多くがクリスチャンで、自らの外に神という座標がある故に、しまいには周囲への心遣いに疲れてしまう私達と違っていたのではないか。

しかし、中に二人ほど、なかなか私が理解しにくい人がいた。彼らが充分理解出来たのは、彼らの人生に起こったチェンジの体験を聞いてからであった。やはり、人間として共通の立場に立ったと思えたとき、心から親しい気持が持てるようであった。MRAの言う、自分を正直に出し、そして互いに聞くことが、誠に大切であると思う。

ビルマで戦った元英国軍人は、ややシニカルな人でもあったが、敵軍の次の世代である私に、「世界平和のために戦う戦友になろう」と呼び掛けてくれた。また彼は、「チェンジとはスポーツだ」とも言ったが、何と素晴らしい言葉かと思つた。

もう一つ、マッケンジー氏のリーダーシップの心地よさも忘れられない。いかにも外交官らしく、話を明瞭かつ短くまとめる話術は素晴らしい。私にも彼の英語が良く分かつた。そして、難しい質問にも的確な答

をし、団員の特性を良くつかんで、それを最も効果的に引き出してしゃべらせ、お役に立たせて下さつた。

タイの副首相や外務大臣など相当な高官とも会えて、緊張もしたが光栄であった。そして短い面会であったにもかかわらず、MRAの考え方がいつも見事に相手に伝わつていったのに感心した。相手の求めているものに、こちらの持つていているものを素直に出していけるのは、捉われな

チェンジを促すものは何か

現在の先進国が近代化をとげた過程の中で、家庭や地域といった小さな組織から、国家という大きな組織の心が大きな役割をなしてきたであろう。タイは今、韓国や台湾といった先進国の次に位置し、内部にさまざまな困難と矛盾を抱えながら、近代化と工業化を急いでいる。従つて、賄賂の効かない合理的行政や、忠誠心旺盛な官吏が是非必要である。MRAは四つの標準を示すが、これは世界中の誰でもよく知っていることであろう。ただ、問題は実践である。人は何故、どうしてチェンジするの

か、或いはその四つの基準に近づこうとするのか。ある話合いの席で、たまたま私は自分自身の国際関係に関するチェンジの体験に触れる機会があつて、何がチェンジを促したのか考えさせられた。そして気づいたことは、問題の前に立たされたとき、私を先に向かつて動かしたものは、説得や論理では全くなく、親しい者（私の場合妻）の無言の励ましと、問題を突き付けてきた側の許しであつたと思われた。そういう意味では自分は何もしなかつたのではないかと思えた。さて、では賄賂に弱い官吏が、強い官吏に、いかにして自ら決断して変身できるのであろうか。一般的に何が人を動かし、人を理想に近づけるのか。

私はMRAでの活動は短く、まだまだ自分のものとなっていないので、全く答えられない。神を信じる者と信じていない者、唯一神を信じる者と、東南アジアの多様な価値観の者、それぞれが実践できる方法を与えられたら有り難いのだが。

思うに、人間の心は、やはりある法則によって動くのではないだろうか。だとすれば、その法則によって、人間の理想と現実のギャップを埋めべき一種のテクノロジーが開発され得るのではないかと思われる。い

やMRAの中にすでにその秘密が示されているのだろうか。新入りゆえに知らないのが残念である。

カンボジアの人々の互いの和解はどうしたら出来るのか

しばらく遠い存在であったカンボジアの人々の苦難に、今回のツアーで再び出会った。第三国へ行くことを希望して待機している人々の収容キャンプとは別に、二十万人を超えるカンボジア人が、タイ国境に逃げ込んで、国連の援助で生きている。ポルポトから逃げ出した年から数えても、もう九年目という恐るべき年月である。彼らはタイにも入れず、ベトナムの支配する祖国にも帰れないと言う。

現在カンボジアには、ベトナムに支援された政権があり、これを敵とするカンボジアの三つの政治集団がタイ国境にへばりついている。その一つポルポト派は、かつて全く凄まじい政治を行って、カンボジアの既存のあらゆる分野を破壊してしまつた。すなわち国境にへばりついているポルポト派以外の二派は、かつてはポルポト派にさんざんに傷つけられた人々である。両派の指導者であるシアヌークにしてもソンサンにしても、身内、ポルポト派に殺された

者がいる。そして現在、ベトナムと戦うということで、ベトナムを敵とする他国の意向でなんとか三派連合の形をとっているが、現地で見聞するところ、互いに全く信頼関係がないようである。これでどうして新生カンボジアが誕生するのであろうか。もし、この問題にMRAがかかわるのなら、二つのアプローチがあるのではないか。一つは、かつて米中がやったように、政治色抜きで、子供のピンポン外交を始めることだ。今彼らは、互いに同じ人間だと思えない流れの中にはまったままなのだ。子供達の笑顔が、ふと共通の立場へのきっかけにならないであろうか。

もう一つは、ポルポト派を誰が許すかだ。彼らにも理屈はあろうが大きな失政と罪を犯したのは事実だ。そしてそれを知っていても、責められれば責められるほど、守りを堅くし、相互理解は遠のくであろう。極限に達している不信と恐怖と敵意の中で、問題を解決するには、力の外交と政治だけではどうにもならないであろう。そして、又しても、ではどうやって彼らの中に不信と恐怖と敵意を乗り越えようとするチェンジが起こせるのかということが問題になってくるのだ。



●夕食会で挨拶する民主カンボジア連合政府ソン・サン首相。左端が川口教授。



●右からマッケンジー元英国大使、ソン・ティー副首相、タイ全国社会福祉協議会ソンボン副会長。

第七回通常総会開催

新会長に住友義輝氏を選出

社団法人国際MRA日本協会第七回通常総会は、去る十二月十二日東京の憲政記念館で行われ、任期満了に伴い、理事並びに監事の改選を行った。更に第十回理事会が二月十二日東京の参議院議員会館で行われ、理事の互選により会長、副会長、並びに専務理事が選任された。新会長には、昨年亡くなった高瀬正二前会長に代わり住友義輝副会長が選出された。新役員の様子は以下の通りである。



名誉会長	土光敏夫	住友義輝	相馬雪香	柳澤 鍊造	藤田幸久	尾関雅則	瀧山養馬	前園静馬	瀧真次郎	赤城海助	塚本三郎	原文兵衛	佐藤魁毅	山形毅												
専務理事	兼松 惠	長島 範明	松岡 紀雄	鶴田 重蔵	加藤シヅエ	杉田 一憲	徳光 稔	山田 千鶴子	畑 千鶴子	野安 清志	長野 房一	兼松 正強	鈴木 三郎	イエンス・ウイルヘルムセン	藤森 英和											
理事	神多嘉子	中畑 婦幹	清水 二宮	榮 秀夫	住友 美子	本郷富士子	木内 信胤	竹本 孫一秀夫	中島 敬作	河原亮三郎	高城 俊郎	中嶋 勝治	本郷 健爾	増田 敬作	木村 行蔵	田嶋 克巳	野田 卯一	矢野 弘典								
監 事	兼松 惠	長島 範明	松岡 紀雄	鶴田 重蔵	加藤シヅエ	杉田 一憲	徳光 稔	山田 千鶴子	畑 千鶴子	野安 清志	長野 房一	兼松 正強	鈴木 三郎	イエンス・ウイルヘルムセン	藤森 英和	河原亮三郎	高城 俊郎	中嶋 勝治	本郷 健爾	木内 信胤	竹本 孫一秀夫	中島 敬作	木村 行蔵	田嶋 克巳	野田 卯一	矢野 弘典
参 与	兼松 惠	長島 範明	松岡 紀雄	鶴田 重蔵	加藤シヅエ	杉田 一憲	徳光 稔	山田 千鶴子	畑 千鶴子	野安 清志	長野 房一	兼松 正強	鈴木 三郎	イエンス・ウイルヘルムセン	藤森 英和	河原亮三郎	高城 俊郎	中嶋 勝治	本郷 健爾	木内 信胤	竹本 孫一秀夫	中島 敬作	木村 行蔵	田嶋 克巳	野田 卯一	矢野 弘典

新会長挨拶

住友 義輝



故高瀬正二前会長のご逝去から半年がたちましたが、この度そのあとをお引き受けることになりました。全くの意外と申すほかありません。三日間考えて、お断りしようと思いましたが、三日前に私にMRAを薦めて下さった方から電話がありました。「自分のことばかりにこだわらず、神の声をよく聴いて考えて下さい」と云われました。もう一度、思い直してお受けした次第です。これからは政治、軍事、文化、経済など広い分野で、一層MRAが求められることになりました。経済の問題に経済で対応しても、根本的な答が得られるとは限りません。しかし思い遣り、分かちあいの心は、全ての分野に共通する答えを持っているからです。

日米欧財界人円卓会議がスイスの

コーで行われるようになり、タイ、フィリピン、台湾、韓国などアジア諸地域のMRAチームから連帯の呼びかけが相ついでおこるのも、MRAのなかに、世界の共存にとって、欠くことのできない信頼を見出すからであります。

ブックマン博士は「世界を再造する」と云われました。私たち一市民にとつて、世界のために何ができるか。その最も確かなステップとして、自分のこころの声を聴き、それに従って、先ず自分から始める。MRAは宗教でも、学問でもなく、簡単に身近な実践であるということ、私はこの三日間でもう一度学ぶ機会を与えられました。

会員の皆様はそれぞれのお立場でMRAの体験を積み重ね、これから迎える世界について、本気で真剣に考えておられます。ブックマン博士はその姿勢に期待して、日本はアジアの灯台と云われたものと思います。MRAは属人的なものではなく、神につながるものです。会長が変わりましてもMRAが変わるものではありません。私は今まで通り皆様とご一緒に、少しでも世界のために役に立つことを念願しておりますので、今後とも宜しく御指導下さいますようお願い申し上げます。

韓国MRA国際会議(ソウル)参加ツアー のご案内 受付中!



テーマ

「良心に支配された世界の創造」

■期間：1988年9月22日-28日

■会場：韓国精神文化研究院

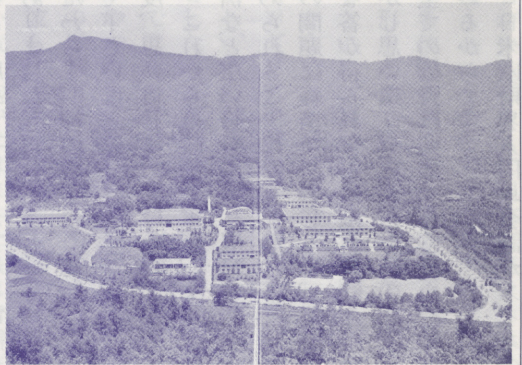
★第三回韓国MRA国際会議にご参加下さい★

韓国のソウルの近郊、城南市で開催されます。MRA国際会議に出来るだけ多くの方にご参加願うべく左記の要領にてツアーを企画いたしました。尚、会議の合間には、オリンピック競技の観戦、その他市内観光等の機会も設けられます。また、韓国政府要人及び産業界・教育界の代表との交流会も予定されています。

記

- ◆旅行期間 ①63年9月22日(木)～26日(月)〔4泊5日〕
②63年9月22日(木)～28日(木)〔6泊7日〕
- ◆旅行代金 ①120,000円 ②140,000円(予定)
往復航空運賃、宿泊費、全食事、送迎バス代、国際会議参加費用が上記旅行代金に含まれます
- ◆最少実施人数 ①A、15名(成田空港発着)
B、10名(大阪空港発着)
②15名(成田空港発着)
- ◆利用航空会社 日本航空、又は大韓航空
- ◆その他 現地ではMRA事務局員がお世話をいたします
- ◆申込締め切り日 7月30日(土)

●会場全景



参加を希望される方は詳しい資料がありますのでMRA事務局へお問い合わせ下さい。

03(821)3737

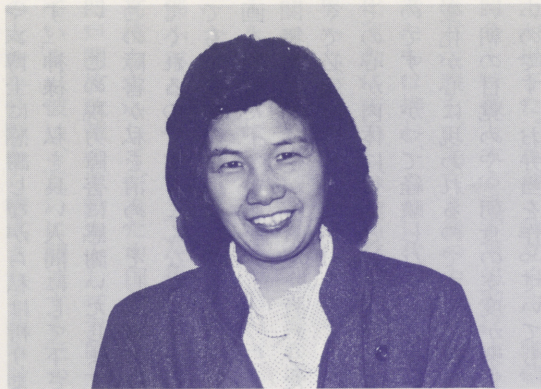
担当
長野又は寒河江

「MRAの歴史」のビデオ(ベータVHS)

ができました。

ダビングを2,000円(送料込)で承ります。

詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。



最高の出逢い

泉 潔子

オキュペーションナル・セラピスト(作業療士)

昨年、「心の国際交流」というテーマで小田原で開催されたMRA国際会議に、MRAのことは何一つ知らない私でしたが、相馬ご夫妻のお誘いで参加させて頂きました。会場に着きますとどの参加者の方々も、心が豊かで地位名誉もある方々のように見え、「これは大変な所に足を踏み入れてしまった。どっしりしよう」という迷いが生じ、心の平静を保つだけで精一杯の私でした。「心の国際交流」というテーマもそれこそ宇宙の彼方の出来事のように、私は先ず、自分自身の心と戦わねばならない有様だったので。

これが後に私の生き方を変えることになろうとは思いませんでした。MRAとの初めての出逢いでした。

相馬雪香さんの著書「心に懸ける橋」が私の人生を大きく変えました。私は深く感動し、幾度となく読み返しました。私が困難に直面したとき、それは教科書となり私を救ってくれます。「夫婦の愛は一生かけて育てていくもの」という言葉は、私の胸を本当に熱くしました。これまで私は、家庭と仕事を両立させなければならぬ重なり、いつも重荷を背負って人生を歩んできました。医療に携わる者としての私は偽善者で、患者はその

犠牲者だったのかも知れない。「人が死んだら私も死にたい」という雪香さんの純粋な言葉に私は泣かされました。もしお二人との出逢いが、私に対する神の計画であるのなら、一体どう感謝すればいいのか分かりません。看護婦の国家試験を受けたとき暗記したはずなのにすっかり忘れていたナイチンゲールの誓詞が新たな力をもって私の心に蘇ってきます。

ナイチンゲール誓詞

われはここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん
わが生涯を清く過ごし、わが任務を忠実に尽くさんことを

われはすべて毒あるもの、害あるものをたち、悪しき薬を用いること無く、また知りつつ、これをすすめざるべし

われはわが力の限りわが任務の標準を高くせんことを努べし

わが任務にあたりて、取り扱える人びとの私事のすべて、わが知り得たる一家の内事のすべて、われは人にもらさざるべし

われは心より医師を助け、わが手に託されたる人々の幸のために、身を捧げん

無力な私に出来ること

私は母と姉妹を、昭和二十一年に旧満州で亡くしました。やがて視力障害者となり、心の眼まで失いかけてMRAの四つの絶対標準からは程遠い私でした。

絶対正直・・・私の不正直さを書き始めれば限りありません。同情されるのが嫌で、見えないものも見えれど悲しい嘘を何度ついてきたことでしょうか。心が自由になったとでもいうのでしょうか、点字を恥ずかしながらに堂々とやれるようになりました。自分の出来ることを惜しみなく与える気持になれたのです。

絶対純潔・・・二十一年間一緒に過ごしてきた主人にさえ愛を確信出来なかつた私は不純だったと思います。私がかもし死んでも、主人は強い人です。ですから平然と生きていくだろうと思っていました。

絶対無私・・・とても私の強い私は、自分ほど他人に思いやりのある人間はいないなどというとも思いません。上がった気持を持っていました。

絶対愛・・・全身全霊で愛すること、そして命を賭けて愛するという偉大な愛の存在をMRAによって初めて知りました。フランク・ブック

マン博士に感謝しながら私は祈ります。「神様、私を良い人間にして下さい。この視力障害に感謝いたします。この障害が私を清め、そして力づけてくれるのです。こんな私でも少しでも世の中のお役にたてるよう、計画を与えて下さい」。

無力な私ですが、真理を教わりたくて必死に祈るのです。そうするとその心が肉体に行動として現われるのです。かつて経験したことのない変化が心に現われるのです。気持ち良い朝の目覚めや、朝食の支度が楽しいのです。お弁当を作っても、娘がそれを食べてくれるという当然のことが嬉しくてたまらないのです。毎日のことだからと簡単に済ませていたお味噌汁の中身にさえ心を込められるのです。

最近私の周囲は、急激に変化しています。時間がとても大切に思えてきました。私は家の雑用を済ませるとすぐ机に向かいます。以前はペンを持っただけで吐気さえ覚えたのに、今は胃もすっきりとし、頭も冴えてくるのだから不思議なものです。正直に書くこととすれば、文章は自然に溢れて出てくるものだと知りませんでした。不義理をしている恩師へのお詫びやら礼状やら、一人一人の顔を思い浮かべながら手紙を書いていると時の

たつのさえ忘れてしまいます。朝、時間をとって静まっていたとき、心に浮かぶ人の名前、それまであまり会いたくないと思っていた人でも、新しい気持ちでお会いしに行くと、何のこだわりもなく話が出来ることも体験しました。人と人とを結ぶ「心の懸け橋」はこういふところから始まるのかなと思うのです。

愛を心に伝える橋 になりたい

先日、日赤病院に入院している友人を見舞に行った時のことです。彼女は産後一カ月にして腫瘍性大腸炎という難病を患って入院しています。口から食することを禁じられ、点滴を命の綱にして生きていますが、彼女の赤ちゃんは乳児院ですくすくと育っています。

私は彼女の何かを悟ったかのような眼差しを見て、一体何があったのかと思わず尋ねました。最悪の状態の時に見た彼女とは別人のように見えたからです。

彼女の、「子供のためにどうしても生きていたい。言葉で言い尽くせぬほど我が儘だった自分が変わったのは病気のお陰」という言葉に私は衝撃を受けました。この悲劇の中で彼女の心は神に近づいていたのです。

私は流れ落ちる涙をどうすることも出来ず、彼女にこう言いました。「たとえ病室にいたとしても、あなたに出来ることがあるでしょう。赤ちゃんはまるであなたを力づけようとしているかのように、元気に育っているのだから、いつか手をつないで歩ける日がきつと来ると信じているわ」。こう約束して病室を後にしました。

女は弱し、されど母は強しと言いますが、本当に「心の革命」は色々な場所で、様々な形で行われていることを実感いたしました。心を尽くし、思いを尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、神の正しい道に自らの生涯をかけられたら最高の喜びです。私の心の眼はMRAによってやっと開かれました。たった一度の人生にたった一人しかいない私です。愛を心に伝える橋になりたいのです。小さな身近な事から、女性として母として、自らを変えていきたいのです。自分の事だけ考えてはいけません。今まで関係ないと思っていた国家の安全や繁栄も、一人ひとりの思いによって成り立つことを実感として感じるようになりまし。それがやがて、祖国愛、人類愛、世界愛という大きなものへとつながっていくのだと信じています。

入会の御案内

社団法人国際MRA日本協会は、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する具体的な活動を行なっています。その事業の充実、発展を図るために左記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼びかけています。

(1) 正会員 個人 年額

法人 年額 3,000円

(2) 賛助会員 個人 年額 50,000円

法人 年額 1,000円以上

郵便振替口座 50,000円以上

東京八一三八二八九

口座名 社団法人

国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供 ②機関紙「MAJニュース」等の送付 ③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

● 世界家族の仲間入り

● 信頼できる人との出会い

● 新時代に必要な情報

● 心身の健康

● 問題解決の秘訣

パリス・チャン氏はペンシルベニア州立大学で政治学の教授を務めるほか、「ニューズ・ウィーク」誌のコラムを連載したりアジア情勢に関する著書も数々発表している。

この記事はチャン氏が、イギリスで発行されているMRAの月刊誌「フオー・ア・チェンジ」に寄稿したものを邦訳した。

中国近代化政策の光と影

毛沢東主席の死去直後の一九七六年十月に、江青女史ら文革推進派四人組が逮捕され失脚してから十年以上が過ぎた。革命、独立自主、階級闘争を特徴とする毛沢東思想による極左主義を、毛亡き後の中国の指導者たちは排し、これに代わって近代化運動に着手し、経済発展の強化に努めた。かくして中国は世界と友好関係を結び、西側の資本と技術の導入を積極的に推進した。

かつて二度にわたって失脚した鄧小平だが、一九七八年以来、最高権力者として、また中国の改革と門戸開放政策の原動力として君臨している。彼は、互いに関連する三つの大きな分野から構成される基本計

画を苦勞し、巧みに実行している。第一は、中国の成長のスピード・アップを狙った改革を実現すること、第二に、彼の政策に抵抗する党内の勢力を退け、古い幹部を引退させること。第三として、現在八十三歳という鄧小平の後を引き継ぎ中国の近代化を担う有能な集団によ



W Cameron Johnson

中国の近代化に必要な新しいビジョン パリス・チャン

昨年十月に開かれた第... 回党大会での報告で、趙は西暦二〇〇〇年までに国民総生産を現状の四倍に増やし、二十一世紀末には近代的で強力な国家を建設し、「中国独自の社会主義体制を確立する」という国家目標を繰り返して表明した。これらの目標を達成するためにこれまでの改

る指導体制を築きあげることである。

先頃、新しい総書記に選出された

趙紫陽は、鄧が直々に選んだ後継

者である。趙は一億以上の人口を抱える四川省の第一書記として、また

一九八〇年から八十七年の間に中国首相として改革への情熱と見事な行政手腕をすでに示してきた。

革と開放政策の拡大を党に求めた。

現在までに、中国の改革と門戸開

放政策はいくつかの目覚ましい業績

を収めてきたが、文句なしの成功とまではいっていない。農業の集団化

と不干渉主義を柱とする地方政策は、農民の勤勉さと工夫もあって農家と地方産業の生産性を高めた。その結

果、特に沿岸地区では、所得と生活水準が飛躍的に高まった。

それとは対照的に、ほとんどの労働者と都市居住者の生活は、年間二桁のインフレ率と物価の急騰のため、わずかに向上したにすぎない。中国の複雑な経済機構と賃金制度を調整することは、経済的にも行政的にも至難の業であり、都市改革と工業改革は深刻な問題に直面している。その上、ソ連のように中国でも、既得権に固執する強い勢力が変革の障害となっている。

はびこる物質主義と貪欲

かくして、趙紫陽の行く手には厄介な問題が待ち受けている。第一に彼は、中央計画経済を再構成するというイバラのような任務に腹を据えて取り組まなければならない。第二に、彼に対する支持の基盤を固め、改革の方法論に関して対立している政策立案協議会内の派閥間の融合を図らなければならない。第三として、強力な政策と執拗な官僚の抵抗に打ち克つ卓越した政治的洞察力と指導力を発揮しなければならない。

しかし、共産党総書記として最も肝心な任務は、中国の新しい指導者を育て国民に新しいビジョン

と生きる目的を示すことであろう。何故ならば、中国の近代化を成功させるためには、国民が道義的、精神的な再生、そして物質的恩恵や個人の利益よりも大きく、力強く、かつ充実感を与えてくれるような理想や精神をこの上なく必要としているからである。

改革と門戸開放政策によって、中国人は経済的にはより豊かになってきたかも知れないが、それだけで満足しているとはいえない。近年、犯罪と、俗にいう「不健全な傾向」が驚くべき勢いで増加している。金儲けや高価な消費物品を求める欲望を大衆に植え付けてしまった結果、貪欲さと物質主義がはびこってしまった。

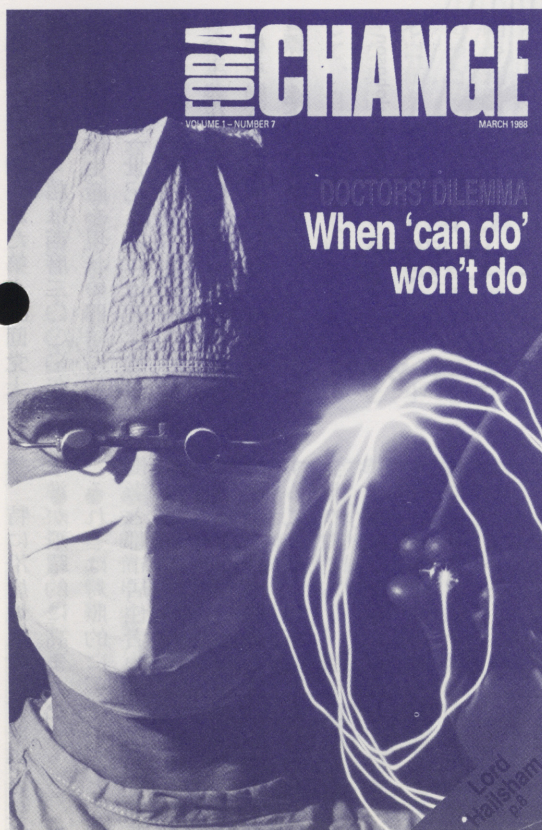
金銭崇拜が社会通念となってしまうのみならず、それは役人の規律と誠実さにも深刻な腐敗をもたらした。多くの役人は、あぶく銭と上流生活の誘惑の前に屈服してしまった。私服を肥やすために、職権を乱用しているだけではなく、投機、密輸、収賄のような違法行為にまで手を染めている。定期的に断固たる処置や処刑が行われるにもかかわらず、汚職が中国の役人に蔓延してしまっ

た。
毛沢東の急進論も鄧小平の実利

論のいずれも理想的な共産党員を作りだしていないのは明白である。その上、多くの中国人はもはや共産主義のイデオロギーを確かなものとは思っていない。彼らは信じておろせる新しい何かを求めており、若者たちを中心に、精神的必要を満たすために教会へと向かっている人々も多い。人々が感じる精神的、道義的空虚感のはねかえりに指導層も気づいてはいるが、一方で西側の「精神公害」と「ブルジョアの自由化」と闘い、もう一方で、社会主義の精神文明を推進するという彼らの努力も中国の抱える精神的危機状況を救う手だてとはなりえていない。

中国近代化への 最良の希望

趙紫陽は今、問題を解決する絶好の機会を得ているのである。一国を動かす中国の近代化を成就するためには人々を金品で釣ったり弾圧するのではなく、人々を説得し納得してもらうのが結局のところ効果的な手段というものであろう。中国のエリート指導者が道義的に再武装されるならば、その道徳的権威は復活し、人々を説得し引き付ける力も強化されるだろう。そこに中国近代化への最良の希望が存在するのである。



IT'S ABOUT TIME...

THE CHANGE

THE NEW INTERNATIONAL MONTHLY MAGAZINE

定期講読受付中

- フルカラー16ページ
- 世界中の情報をすばやくあなたに
- ニュースマガジンのニューウェーブ

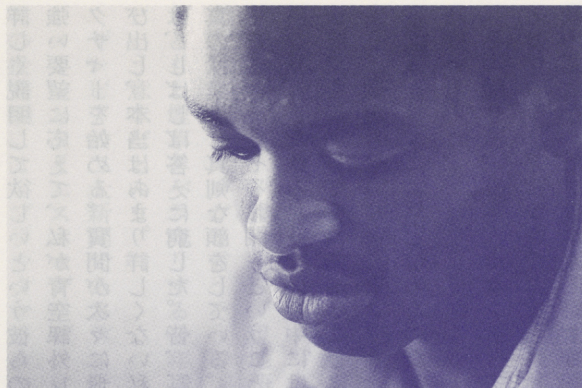
「フォー・ア・チェンジ」定期講読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、希望する講読期間の料金(3ヶ月=¥1,000 1年=¥4,000 *共に航空郵便代込み)を郵便振替(口座番号:東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下さい。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで 過ごした2年間 (その5)

寒河江 亮



我慢くらべ

初講義の日から三週間が過ぎ、学生達の顔と名前がようやく一致してきた。登校拒否症からも何とか脱却できたが、機材不足で実習がほとんどできないため、学生達にフラストレーションがたまってきた。先日の講義中に科学学部のクラスの学生が、「実習が出来ないのなら写真の授業じゃない」などと、当たっているだけに、尚更カチンとくることを言ったので、「それなら無理に講義に出て来なくてもいい」と言い返してしまった。すると次の時間、八名の学生が無断で欠席した。早くもポイントかと思うと辛いところだが、ここがお互い我慢のしどころだ。そもそも最初に彼らに同情して、甘い態度をとったのが良くなかったのかも知れない。遅刻が当たり前のようになってしまったし、講義中、平気で教室を出たり入ったり、完全に軽く見られている。しかし、真面目に頑張っている学生達のために何とか方策を考えなければ……。

このクラスに比べ、私が所属しているジャーナリスト学部のクラスには、落ち着いた大人の雰囲気があり、やる気も充分に感じられる。週二時

間の講義では物足りない。徐々に訴えるので、「君達ももっと勉強したいのなら自分の空いている時間を使って協力したい」と提案したら、一人の学生がサッと前に出て来てクラスの意見を手際よくまとめてくれ、「毎週月曜日の放課後に、特別に一時間教えて欲しい」ということになったので、喜んで引き受けることにした。彼らのやる気に何とか応えなくてはと思う。いつも受け身でいるのではなく、自ら行動を起こすことによつて新たな可能性が開けることもあるのだということも分かって欲しい。他人の助けばかり当てるのではなく、自らの努力で何かを生み出すことが彼らにとつてとても大切なことだ。このところ何かと気の滅入るような出来事ばかり続いて、私自身のやる気すら薄れかけていたのだが、今回は彼らにとつても勇気づけられた。グチを言う前にやれる限りのことはトライしてみよう。結果も勿論大切だが、現時点では、共同作業のプロセスそのものが、お互いに最も大切なことに思える。

若きザンビア人の悩み

学生達と一緒に、タバーンと呼ばれるザンビア風一杯飲み屋に行つて

きた。飲み屋と言っても裸コンクリートの馬小屋のような粗末な建物で、すり切れたレコードの単調なメロディーが騒々しい。外国人など滅多に来ないのか、先客のザンビア人から体中をなめまわすような遠慮ない視線を浴びる。早速、地酒のチブクの回し飲みが青空の下で始まった。「君達は何も食わずにチブクを飲むのか？」と尋ねると、「チブクは栄養価が高く、食物のようなものだから、飲みながら食べる必要はない」との返事。私はお腹が空いていたので、カレー風味のミートボールと茹ピーナツをつまみに買ってきてもらった。すると、「たった今、食う必要はないと言った連中の手がごんごん伸びてくるではないか。「なんだ、あればやっぱり食うんじゃないか」と、思わず笑ってしまった。私の懐を心配して、皆、強がりを言っていたのだらう。好きな物をとっていいからという、ふかしたサツマイモにフライドポテトと、彼らの食欲の旺盛なこと。いつの間にか、全く関係のない連中が回し飲みの輪に加わって堂々とタタ酒を飲んでいられるのも、いかにもザンビアらしい光景だ。チブクをどんどん追加するが、ピッチが早く追いつかない。もう十リットル以上はいっている。日本女性について

詳しく説明して欲しいという彼らの強い要望に応えて、私が青空課外レクチャーを始める。質問が次々に飛び出し、本当はあまり詳しくない私は、しばしば答えに窮した。皆、写真の授業より真剣な顔をしている。

さて、そろそろお開きということになり、まだ飲み足りない連中にはチブクを追加してやって帰ることにする。勘定もせいぜい二十クワチャ（当時で約三千二百円）位のものだから安いものだ。

その帰り道、日本人ボランティアとヨーロッパ系ボランティアとの比較の話になった。日本人に対する評価が断然高い。また、過去に植民地支配を受けた英国からのボランティアに対しては、感情的なしこりが残っていると彼らは言う。

見下されるということに対する強い嫌悪感、そして、世界でのアフリカのイメージというものを相当気にしているということに驚かされた。日本とよく似ていると思った。

すっかり彼らと意気投合した（と思った）私は、「とにかく、これからザンビアの明るい未来のために頑張ろうじゃないか！」などと、本当は、あまり自信のないことを酔いにまかせてつい口走ってしまった。すると、それまで陽気にはしゃいで

いた学生の一人が、途方にくれたような声でポツンと一言呟いた。「しかし、ミスター・サガエ。この絶望的な状況の中で、一体どこから手をつければ、俺達に明るい未来が開けるといえるのか？」……漆黒の闇の中に彼の目が光った。

その一言で充分だった。彼らは知っていたのだ。私の本心などどつくの昔に見抜かれていた。初めてザンビア人の本音を聞いた、と思った。いや、あれは彼らの悲鳴だったのかも知れない。

酔いも一気に醒め、頭の中で様々な言葉がグルグルと駆けまわっている。

「お前は一体何の目的でこの国に来たのか？」

「たったの二年間で、何か立派なことをやろうとか、何かを残そうとか考えているのではないのか？」

「どうせ自分の国ではないという気持ちがあるから、お前はあんな無責任なことが言えるのだ。彼らの悩み、苦しみを本当に理解しようとしたことがあるのか？」

「お前はザンビア人の為と言いながら、本当は自分自身のためにザンビアに来たのではないのか？」
「気の利いた答えがどうしてもうかんではない。」

そんな私の心中を察したのか、学生の一人が話題を変えてくれたので、私は救われた。それにしても強烈なカウンターパンチだった。これからは減多なことは言うまいと肝に銘じてる。

ミシヤンガ・ボーイ

つい最近、ザンビア人の主食であるミルミル（トウモロコシの粉）の小売り価格が、一気に七〇%も値上げされたと新聞に出ていた。

このような重大な値上げが何の前触れもなく新聞に発表され、即日実施されるのだからたまったものではない。まあ、国によってやり方の違いというものがあるのだろうから自分達外国人は仕方ないとしても、理解出来ないのはザンビア人の権力に対するあまりの従順さである。

日本で、或る日突然米の価格が七〇%も値上げされたら、まさに血の雨が降るのではないだろうか。値上げそのものよりも、政府の問答無用のやり方に怒りが爆発するだろう。首相の首の一つや二つは飛び、私も国会議事堂に石くらいぶつけると思う。事はそれ程重大と思えるのだが、そういう話はまず聞かない。
ルサカでは、生活必需品、突然市

内のあらゆる店から姿を消す事は珍しい事ではない。ガソリンが、食用油が、タバコが、ビールが、洗剤が、そしてパンが消えた。一カ月そして二カ月と、人々はじっと耐えるのだ。入荷したらしたで、早朝から何百人という人々が列を作り、アツと言う間に売り切れてしまう。（この中に、後述するミシヤンガ・ボーイ達が多数いる。）白バイで乗りつけた警官や、銃をぶらさげた兵士が行列を無視して裏口から品物を手入しているのに誰も何も言わない。ザンビア人はおとなしいのではなく、無気力無関心なのかといえれば決してそうではない。新聞には生活の苦しさを訴える庶民からの投書が絶え間なく出ているし、不満は相当高まっている気配がするにも拘らず、社会情勢に変化が生じている兆しが見えないのだ。

先日、部屋を掃除してくれるおばさんに、「どうしてみんな黙っているのか。生活は苦しくないのか」と聞くと、大変に苦しいという。ミルミルと食用油を買って、あと通勤のバス代やらこまごましたものを引くとそれで給料はフィニッシュだという。たしかに、月給一万五千円で一家六人を養っている知人は、サラダオイル一罐（五リットル）が三千八百円もするし、食べていくのに精一杯で貯

金など全く出来ないとかぼしていたし、洋服も五年ほど買っていないと言っていた。

では何故行動を起こさないのかと尋ねても、沈黙か苦笑しか返ってこない。私はよほどバカな質問をしてしまったのか。一口に庶民とは言え、日本のそれとは比べものにならないほど貧しい彼らは、今必死に耐えているのだろうか。その忍耐が頂点に達した時のことを考えると空恐ろしい気になる。何とかうまい方法は無いものか。

そう遠くない昔、日本にも闇市というものがあつたそうだが、ルサカのブラックマーケットはそれに近いものだろう。恒常的な品不足が続くルサカで、私も背に腹は変えられず、時々利用している。とにかく市内の商店やスーパーには全く見当たらない品物が、ここでは見事に手に入る。もちろんその値段は、定価の三倍から四倍という仕組みになっている。そのブラックマーケットの主が、ミシヤンガ・ポイ達である。現地語で煙草をミシヤンガと言うそうで、もともと煙草をバラ売りする少年達という意味だという。

ザンビアの二大新聞であるデイリー・メールとタイムス・オブ・ザンビアの投書欄には、ブラックマーケット

トの取締をめる市民の声が溢れているし、実際、当局による取締が最近あつて、いったんは彼らも姿を消した。しかし、翌日彼らは何事もなかったかのように商売を再開した。しかも、先日の投書によれば、ミシヤンガ・ポイも職業の一形態であるとの判断が当局によって下されたのではないかということだ。そもそも、取り締まるはずの警察官からして彼らのいいお得意様であるのだから、何となく領ける話ではあつた。

自分の親ほどの年の人から百円、二百円の借金を申し込まれるたびに困惑してしまう。ザンビア人には貸したと考えるのでなく、プレゼントしたと考えればいいという人もいるが、そんなものなのだろうか。なんだかザンビア人を対等の人間として扱っていないような響きを感じられる。

日本人をなめるな!

とうとう堪忍ぶくろの緒が、プツンと音を立てて切れた。講義を受け持っている四つのクラスの一つ、科学学部の学生の態度が許せない。時にはおしんのように、時には高倉健のように、じつと耐えてきたが、クラスの約半数が無届けで欠席するに

至って遂に頭に血が上り。出席していた学生達に、「講義に出て来ない連中はこのクラスから追い出す。このクラスの今後のことは学部長とよく相談して決める。明日からはどうしても続けたい連中だけ私の教室に来なさい!」と、高らか(?)に休講を宣言した。どうだ、まいったか!

その足で、学部長の家を訪ね、これまでの事情を説明し、何らかの処分をとってほしいと強く要求した。「いや、全くそれは知らなかった。きみの心境はよく分かる」と言う。「何をとぼけているのか。出欠簿に毎日目を通していけば、一目瞭然ではないか。とぼけるんじゃない」と思ったが、とにかく調査して善処すると約束したので、その日はホテルに帰った。

翌日、教室へ入って驚いた。全員が出席している。机も椅子も足りないので、半分以上の学生が立ったまま。あのジャパニーズの講師が怒り狂っていたとの連絡が無断欠席組に入ったのだろう。このまま何事も無かつたかのように講義を始めようかとも一瞬考えたが、いや、それではまた甘く見られる、それにやはり筋は通さねばと判断し、「講義がそんなに面白くないのならこのクラスをやめてくれて結構。どうだ、除籍の

手続きをどうするか?」無断欠席した連中を一人づつ呼んでこう聞いてみた。

そんなことをしたら、単位が取れなくて卒業に支障が出てくるから誰もハイと言う訳がない。本当は、この際いいチャンスだから、やる気の無い連中には出ていってもらって小数精鋭でいきなかつたのだが、どうしても続けたいと必死の形相で懇願しているのに、いや出ていけとは言えない。やつぱりちよつと甘いかな。無断欠席の理由を問うと、すぐばれる他愛ないウソをつく。これ以上追求してもウソを重ねるだけなので、最後に一言「日本人をあまり甘く見るな」とすごんで許すことにした。

日本人は英語ができないから、或いは教えた経験が無いからと遠慮ばかりしては、なめられる。一度なめられたらクラス内の秩序は失われ、講師の権威は地に落ちる。

実習が始と出来ないため彼らのフラストレーションがたまっているのは痛い程理解出来る。だからこそ私物の機材やポケットマネーを提供してここまで細々ながらも続けてきたその辺を彼らが理解してくれなかつたから頭にきた。ただ、こんな状態で写真を学ばなければならぬのは彼らの責任ではない。むしろ彼らは

犠牲者なのだ。一枚でも二枚でもいいから、彼ら自身で撮った写真を持って卒業させてあげたいと切に思う。何とかフィルムを調達して、実際に撮影できる日が来た。彼らのはしやぎようといったら、まるで小学生、いや幼稚園児が遠足に行ったときのようなのだ。

写真を撮るところかカメラに触るのさえ生まれて初めてのことだから興奮しているのだろう。その気持ちがよく分かる。ほほえましく思うと同時に、目先のことだけに一喜一憂するのではなく、基本の大切さ、そして我慢の大切さもいつか分かってもらいたいと思う。明日の授業でおしんの話でもしてみようか。

現地事情……

「ミスター・サガエノ私の顔の色ちよつと変みたい。もう一回焼き直してくれませんか」と女子学生の一人が私に尋ねた。

「えっ？ちゃんと充分に黒く出ているじゃないの。ちつとも変じゃないヨ」と私は答えた。「でも他の人の写真は白っぽく写っているから私のもそうして欲しい……」

「……あのね、黒は黒、白は白をちやんとだすのが写真の基本なんだ。」

君の膚の色は他の人よりも黒いんだから黒くて当然……」

オレンジ色の薄暗い暗室光の下でも彼女の顔色がサーツと変わっていくのが分かる。しまったと思ったがもう遅い。重苦しい沈黙が暗室をしばし支配する。

「ミスター・サガエの言っていることは間違っていないよ。我々はたしかにブラックです。だから写真も黒くて当然です。なあ皆んな！」あの男子学生の呼びかけになんとも複雑な含み笑いが暗室のあちらこちらから返ってきた。私は奇妙な感覚に、これまで決して彼らが私に見せることのないような素顔を見てしまったような感覚に捉われていた。彼女は明らかに実際の皮膚の色を好んではいない。もつと白くになりたいという願望が見受けられる。さらに彼女はその願望の不自然さを誰よりも承知している様子だ。

一体どのように対処すればいいのか。写真技術的には彼女の言っていることは間違っている。しかし、いま私が対峙しているのは、写真を媒介とした一人のザンビア人の人格らしいのだ。その最も深いところに私は触れてしまったのかもしれない。次の言葉が出てこない。結局、私は意に反する彼女の望み通りの写真

を焼いてあげた。しかし、あれで本当に良かったのかは分からない。これもいわゆる現地事情だったのかもれないが、日本では思いもしなかった、或いは問題にもならなかった事態に対処しなければならぬケースは多い。

水温が常時三十度近くある国で二十度を守れとは言えないし、現実はこの国にないもの、入手不可能なものについて説明するのは空しいものだ。また卒業生の大半が職を得られない現実を前に、果たしてここまで教える必要があるのかと考え込むことも度々あった。結局は「現地事情」を優先させることが多く、私のフラストレーションもたまる一方だったが、仕方のないことと割り切って考えるしかなかった。

とは言え、場合によってはどうしても譲れないこともあるわけで、例えば精密な機材を大切に扱う、細心の注意を払って仕事する、そして集中力などは写真の上達には欠かせない要素だが、善悪、優劣の問題ではなく、彼らはそういう感覚に全く乏しかった。私はゴミをちゃんとゴミ箱に入れさせることから教え始めなければならなかった。そのようなことは実は大変なお節介であったのかもしれない。もしかしたらそれを必要としないか

もしれない人々に日本の感覚で強制（講師の権限としての）するのは大変勇氣のいることだった。その表情や態度から何か失礼なことを言ったのではと思うことも沢山あったが、理解されたかどうかは別にして誰かがやらなければならぬ仕事だと思っただけながら、何とかがやってきた。彼らはよく耐えてくれたと思う。

ここはどうせアフリカのザンビアなのだからと割り切ってしまうくらいでもイージーにやれたし、別にノルマがあったわけではないから誰からも文句を言われるわけでもなかった。だからこそ自分のあり方、考え方というものが私にとって最も重要な課題であった。

（次号に続く）



●学生達とタバーンで。

似たもの夫婦

どんなに仲のよい夫婦であっても、その老若を問わず、毎日の生活の中で起こる意見の対立やトラブルは後を絶たないものだと思います。

私達は結婚して六年になりますが、周りの人達には仲のいい夫婦だともっぱら噂されているようで、そのためでしょうか、色々なところから夫婦間のトラブルや揉め事などの相談が持ち込まれます。人生経験の浅い私達ですが、それなりに知恵を絞って解決法を考えてきました。

ところが、実は私達自身にも問題がいろいろとあったのです。私達は恋愛経験と言うものを経ずして結婚しました。MRA運動を通じて社会に奉仕しようという信念が私達二人を結びつけたのです。正直、純潔、無私、愛をその信条とした家庭生活を営んで今日に至りました。早朝の静かなひとときに、良心の声に耳を傾けることから一日を始める私達が不愉快さを感じる事は非常にまれでした。ですから家庭の中はいつも平和に満ち溢れて幸せでした。ところが結婚後暫らくしてある事に気付きました。私達は共に長男、長女であり、双方とも学校で教鞭をとってい

た経験があります。そのせいでしようか、教え子に号令をかけるように相手を指図する習慣がなかなか抜けませんでした。そのため必然的に一つの家庭内に号令をかける人が二人存在することになり、お互い口にごそ出させませんでした。内心ではそれが許せなかったのです。



その後、台北へ移り、常時MRAの仕事をする様になりました。その頃から、家内は子供の養育に専念しはじめ、私はMRAの仕事を自分に与えられた唯一の仕事と考え、その為には、まず「自分自身が変わる事により、他人をも変える」との理想に燃え、全力投球してきたのです。

この冬休みはとても行多く、あちらこちらを駆け廻る事が続きました。疲れ切った体で家に帰っても、家内の頭の中は子供達の手で一杯の様子で、それに疲れてもいたのでしようが、家事をおろそかにしている事も時々あり、私はつい命令的な口調で彼女に接してしまつたのです。

関係の夫婦

劉仁州

台湾MRAフルタイム

なるべく柔らかい言葉を選んではいたつもりなのですが。

そんな時、ある大学のMRAグループの合宿が終わりました。私はそれを機にある決心をしました。私からはお互いに感謝しあう気持ちを誓いました。そこで先ず家内の要求、

言い分を聞くことから、そして傷つけ易い言葉の一切を慎むことから始めました。

或る日、いつもの通り台所仕事の手伝いをしている時、なぜか、「女の台所仕事も大変な事だな」と、未だかつて考えたこともない家内を思いやる気持ちが心に浮かんできました。自分が今やっているのは、彼女の苦勞を肩代わりする意義ある仕事だという満足感を覚えたのです。

とは言え、いざ家内と顔を合わせると、いつも感謝をするという私の決心もぐらつきそうになり、再三心を引き締める必要がありました。やはりそんな或る日のことでした。

二人三脚で

前の晩、深夜まで子供をあやして眠れなかった家内は、朝、私が出出する時に起きてくれませんでした。私はとても不愉快な気持ちで、「これから出かける」の一言を残して家を出ました。昼に家に帰ると、彼女がにこやかな顔で出迎えてくれたので私はびっくりしました。彼女は前夜書いたという次のような手紙を私に差し出しました。

「この冬休みの間、あなたは仕事に追われとても忙しかつた事でしょう。

私も家事に追われてとても忙しかったの。私はいつもあなた以上に仕事をして疲れているのに、どうしても私を手伝ってくれないのか、いつも思っていました。

一体何が私をいつもこんなに怒らせているのかしら。この気持ちを一日も早く変えないと駄目になってしまう。神様どうか私に理性を授けて下さい。これから先も、私達夫婦が協力してやらなければならぬ事が山積しているのですから。

私はもう絶対にあなたに怒ったり、不満を抱いたりしません。二人でこれからも頑張りましょう。

私はそれを読んで、家内の勇氣に深い感銘と愛情を覚えました。そして神様が私達夫婦に与えて下さったこの温かく深いお恵みに感謝して止みません。これから先、どんなに大きな人生の荒波が押し寄せてこようとも、二人でしっかりと手をつないで頑張っていくつもりです。

劉一家は現在、豪州メルボルン市のMRAアジア・太平洋センター「アーマ」で行われている青少年スタディーコースの運営スタッフの一員として活躍中です。

キヤノン 賀来龍三郎 社長
講演(二月二十七日)

「倫理国家構想」
あるべき日本の責任と進路

MRA文化講演会 録音テープできました!

ご希望の方には、千円(送料込み)でお譲り致します。
事務局までお申し込み下さい。

担当 杉

事務局近況

●ノルウェーのイベント・ウイールヘルムセンさんが先月来日され、三月の月例会のゲストとしてスピーチをして頂きました。

●先月下旬から今月初旬にかけて、長野事務局長がタンザニアに「難民を助ける会」のお手伝いで出張しました。

●日米欧財界人円卓会議アメリカ・キヤンペーンが今月行われます。次号のレポートを期待下さい!

MRA世界大会(スイス) 参加ツアーのご案内

●日程

月日	都市名	摘要
8月6日(土曜)	大阪発 東京発	大阪及び東京にて出国手続き終了後空路、ミュンヘンへ。 【機内泊】
8月7日(日曜)	ミュンヘン着	ミュンヘンへ到着通関後、半日市内観光。 【ミュンヘン泊】
8月8日(月曜)	ミュンヘン滞在	終日：バスにてザルツブルグ観光 【ミュンヘン泊】
8月9日(火曜)	ミュンヘン チューリッヒ ローザンヌ コ	列車にて、チューリッヒ・ローザンヌ及びモントルーを経由してコへ。 【コ泊】
8月10日(水曜)	コ	終日：MRA世界大会に出席
8月13日(土曜)	コ	【コ泊】
8月14日(日曜)	コ ジュネーブ	バスにてジュネーブ空港へ。出国手続き終了後、空路帰国の途へ。 【機内泊】
8月15日(月曜)	東京 大阪	東京及び大阪空港へ到着。入国・通関手続き後、解散。

MRA 50周年



- ◎旅行期間 63年8月6日(土)～15日(月)〔10日間〕
- ◎旅行代金 お一人様 450,000円(予定)
往復航空運賃、ホテル代、食事、送迎バス代、世界大会参加費用が上記料金に含まれます
- ◎添乗員 全日程同行いたします
- ◎募集人員 20名以上30名まで
- ◎申込締切日 6月30日(木)

お問い合わせは
MRA事務局へ **03(821)3737**